

隔世之感

巻・頭・言

令和3年度特許庁技術懇話会 代表委員 角田 慎治



令和3年度の特技懇代表委員を務めさせていただきます角田慎治と申します。特技懇の活動をがんばって盛り上げていきたいと思えます。1年間どうぞよろしくをお願いいたします。

今、この巻頭言を執筆しているのは、コロナ禍のため2ヶ月以上に亘った緊急事態宣言が解除されたタイミングですが、感染者の推移は油断できないような状況で、リバウンドの起こる可能性が高いとの専門家のコメントがテレビで紹介されています。この特技懇誌が配布される5月～6月頃には、状況が好転していることを願うばかりです。

コロナ感染の広がりに対応するため、ちょうど1年前の4月頃から、特許庁の審査・審判では本格的に週に数回のテレワークが開始されたことを記憶しています。この1年で、それまでと大きく変化したのは、やはり人とのコミュニケーションのやり方でしょう。直接近づいてする会話は、家族以外には、マスク無しでは考えられなくなりましたが、一方で、SkypeやZoomといったオンライン会議システムを使った会話は、今では当たり前のように業務上のコミュニケーションツールとして使用するようになりました。コロナ禍になる以前は、私は全くと言っていいほどこれらのツールを使っていなかったもので、たった1年ですが隔世の感があります。

オンライン会議システムを使い始めた頃は、飛沫が直接届かないように会話する手段ぐらいにしか思って

いなかったのですが、使ってみると、テレワークで離れていても簡単に相手にアクセスできますし、また、コメント投稿機能による意思疎通もでき、結構便利なコミュニケーションツールであることを実感するようになりました。

ところが一方で、オンライン会議システムの便利さとは対照的に、直接近づいてするリアルなコミュニケーションの有り難さも実感するようになりました。テレワーク日ではなく通常の登庁日には、ある意味、無計画にコミュニケーションができるので、例えば、仕事上のことで誰かと相談していたところ、たまたま近くで会話を耳にした別の人が良いアイデアを持っていて教えてくれるようなことが起こったりします。こんなふうに偶発的なコミュニケーションができることは、ソーシャルディスタンスに気を遣うこんな状況だからこそ、余計に貴重に思えてきました。きっと多くの方が同じように感じているのではないかと思うのですが、いかがでしょうか。

特技懇は、会員相互の親睦と研鑽を行うことが、活動目的の一つに挙げられていますが、親睦も研鑽も、会員相互のコミュニケーションが悪ければ到底成し得ないことです。この1年で使い慣れてきた便利なオンライン会議システムと、有り難いものと再認識できたリアルなコミュニケーションの両方を使って、工夫しながらこの状況を乗り越えて活動していきたいと思えます。